

氏名(国籍)	張 惟 綜 (台湾)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博甲第4869号
学位授与年月日	平成21年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	吉田松陰の研究—自己否定の思想とその展開—
主査	筑波大学教授 文学博士 伊藤 益
副査	筑波大学教授 文学博士 笹澤 豊
副査	筑波大学教授 博士(文学) 桑原直己
副査	筑波大学准教授 Dr. phil. 小野 基

論文の内容の要旨

本論文は、序と七章の本論、および結の九つの章と、詳細な参考文献表によって構成されている。本論文の目的は、吉田松陰の思想の根底に自己否定の思想が存することを明確にするとともに、そうした思想がさらに後の志士たち、わけても久坂玄瑞に受け継がれていったことを究明する点にある。

序は、論文全体の構想を克明に記すもので、主として、本論文が上記のような目的で書かれたことに言及する。

第一章「諫の思想」は、松陰の「諫」の思想を、現時点の状況を否定し、あるべき状態をめざして邁進しようとする否定の弁証法的論理、すなわち自己否定の思想としてとらえたうえで、こうした自己否定の思想に見られる実践的特性を究明するものである。その際、著者は、松陰の「諫」の思想が、自己を罪深い人間と見なす思考に根ざして、自己反省を他者にも促す思想として機能していることをあらわにする。

第二章「忠孝の思想」は、第一章で論じた「諫」の思想が、主君への「忠」を前提としていたことを踏まえて、「忠」と「孝」とが、松陰の内面でどのような関連をなしていたのかを追究する。著者は、松陰が平重盛を例にとり「忠」「孝」の一致に言及していることを明確にしたうえで、松陰には、「忠」を実践することがそのまま「孝」となりうるという思想があったことを鮮明にする。

第三章「生死の思想」は、「諫」を行って受け入れられなければ死をも賭するという松陰の思想、すなわち「諫死」の思想において、松陰自身をも含めた人間の生死がどのような意義をもっていたのかを問う。著者によれば、刑死の直前に書かれた遺書『留魂録』のなかで、松陰は、人間の生死を四季の循環になぞらえる考えを示し、長生きをして天寿をまっとうした者にも、夭折した者にも、それぞれに人生の四季があるのだ、と説いたという。こうした四季論は、人間の生の循環のみならず、その反復更新をも説くものであり、これによって松陰は、自己の死後にもその生命性は後進に受け継がれつつ生き残る、という認識を示したのだ、と著者は説く。

第四章「国体の思想」は、西洋列強の圧力下に置かれた幕末の日本の在るべき姿は、天皇を頂点に置いてそれに万民が従うという形の、「一君万民」の国体を実践的に具体化してゆくこと以外にはありえない、という松陰の国家認識を明らかにする。著者は、こうした国家認識の根底には、強烈な危機意識があるのであ

て、それを顧慮することなしに松陰を右翼思想の巨魁として批判することには問題があるという認識を暗示している。

第五章「草莽崛起の思想－『信』から『行』へ－」は、松陰が天皇（皇国）への絶対的「信」を、自己犠牲的な「行」によって具体化しようという意図をもち、それを「草莽崛起」という概念によって表わしたことを究明する。ただし、著者によれば、松陰の「草莽崛起」とは「草莽」が直接天皇を動かすというのではなく、「草莽－藩－天皇」という階層的な枠組みをもつものであった、という。

第六章「主体的思想の展開－水戸学との比較を通して－」は、松陰の国家思想が藤田幽谷、会沢正志斎、藤田東湖らの水戸学の影響のもとに確立されたことを明らかにするとともに、その国家思想が、やがて水戸学の枠を超えて、「征夷」としての役割を果たせない幕府を打倒することをめざすもの（倒幕論）へと変化してゆく経緯を鮮明にする。

第七章「思想の伝承とその展開－久坂玄瑞の場合－」は、松陰の「草莽崛起論」を弟子の一人として目のあたりにした久坂玄瑞が、松陰の思想を受け継ぎつつそれを発展させて、藩の枠を超えてすべての志士を倒幕のために糾合するという「草莽志士糾合義挙」という考え方をとるに至ったことを明らかにする。

結において、著者は以上の論点を総括しつつ、松陰が説いた「尊王攘夷」の思想の幕末における意義を跡づけ、それを単なる天皇狂信主義に終わらせないためにはいかにすればよいかを模索する。著者は、私たちが未来をいかに生きるかによって過去は変容されうるものであり、「尊王攘夷」の思想もそうした未来へのまなざしによってその意味を変容されるのではないかと述べる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

日本における吉田松陰研究にはすでに汗牛充棟のおもむきがあり、すべての論題は論じ尽くされた感がある。したがって、そこに斬新な見解を加えることは至難であるといわざるをえない。本論文の松陰研究も、従来の研究の流れに沿ってなされており、その流れに決定的に新しい水脈をもたらすものとは言えない。また、松陰の説く国体論や尊王攘夷論に対する批判が明瞭には認められない点において、本論文は松陰の思想に追従する側面を覗かせる。

しかしながら、このことは、本論文が何ら独創的な知見をもたないことを意味するわけではない。主君や幕府への「諫」を説き、そこに死を賭する松陰の思想が、自己の罪の意識を根底に置いた自己否定の思想であることを明確にした点は、従来の研究には認められない、著者の独創性を示すものである。また、本論文の四季論は、古来日本人が有する植物的死生観、すなわち植物の生長・枯死・復活の過程に即して人間の生死をとらえる考え方のなかに松陰の死生観を据える点において、きわめて斬新なものと言えよう。さらに、結論部分に示された、未来をいかに生きるかによって過去が変容されうるという発想は、大島康正『時代区分の成立根拠』の認識を踏襲するものであるが、それを松陰研究にまで敷衍して語ろうという姿勢は、他に類例を見ないものと言えよう。

著者は、台湾出身の外国人である。それにもかかわらず、本論文の文章は日本語としてきわめて優れたものである。本論文の日本語の読みやすさについては、他の日本人の論文に比べた場合にも、卓越したものであると言わなければならない。しかも、著者は、現在の通常の日本人にはほとんど解読が不可能ともいえるべき松陰および松陰関係の文献を縦横に読みこなし、それらをきわめて的確に理解している。本論文が日本および台湾において公表されるとすれば、学界に多大な貢献をもたらすものと予想される。

以上の諸点を勘案するに、本論文は、現行の松陰研究の水準に達するばかりか、一面においてはそれを凌駕するものとして、高く評価することができる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。